
大人のキス

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大人のキス

【Nコード】

N2232S

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

先生からキスについて聞いた隆子。そのことについてあれこれ考えていると。小学生の淡いお話です。

第一章

大人のキス

「いいかい、キスつてものはね」

先生が子供達に話していた。

「そうそうなことではできないものなんだよ」

「そうそうって？」

「どうしてなんですか？」

「お互いが好きにならないとできないからだよ」

だからだと。まだ小学校四年の子供達に話すのである。

「だからなんだよ」

「だからなんですか」

「それで」

「そうだよ。キスは好きな人とするんだよ」

先生はまた話した。

「嫌いな人とはできないんだ」

「どうしてなんですか？」

子供達は先生の今の言葉に質問した。教室のホームルームの時間の中の些細な話である。だが皆真剣に先生の話を聞いている。

「嫌いな人とはできないんですか？」

「どうしてなんですか？」

「それはね。好きじゃないと心が動かないからだよ」

先生はだからだと話す。

「それでなんだよ」

「それでなんですか」

「好きな人とだけ」

「キスできないんですか」

「そうだよ。だからいいね」

先生は子供達にさらに話す。

「皆も好きな人ができたらね」

「キスできるんですね」

「その時は」

「うん、そうだよ」

その通りだと話すのだった。

「逆に言えば好きな人がいないとキスはできないんだよ」

「そうなんですか」

「何か難しいですね」

「そうですね」

子供達はそれを聞いて考える顔になった。そうしてだった。

ホームルームの後でだ。女の子達が集まって話すのだった。

「キスってそうなんだね」

「好きな人とじゃないとできないんだ」

「そうなんだ」

「そういうものなんだね」

こうそれぞれ話す。そしてその中でだ。

石黒隆子がだ。こう言うのだった。

「それじゃあだけれど」

「それじゃあって？」

「隆子ちゃん、どうしたの？」

「お父さんやお母さんとだったらいいのかな」

「キスしていいって？」

「そう言うの？」

「ええ、それはどうなのかしら」

こう皆に尋ねるのだった。

「それは」

「ううん、どうかな」

「それって」

周りはその彼の言葉に首を傾げさせて言った。

「先生の言葉って何か違うみたいよ」

「どうやらね」

「違うの?」

隆子はその皆に問い返した。

「お父さんやお母さんにじゃないの?」

「恋人とかじゃないの?」

「つまり彼氏ね」

皆はこう話すのだった。

「そうじゃないかしら」

「ねえ」

「じゃあ」

隆子はその皆の言葉を聞いてだ。また言うのだった。

「あれ?」

「あれって?」

「まだ何かあるの?」

「私と美奈子ちゃん」

今度は親友の美奈子を見てだ。そして言ったのである。この場に

その美奈子もいるのだ。黒く長い髪の可愛らしい女の子だ。

「私美奈子ちゃん大好きだけれど」

「ええ、私も隆子ちゃん好きよ」

「この場合はキスできないの?」

「こう言うのだった。」

第二章

「それは」

「お友達は駄目なんじゃないの？」

「それはね」

またここで皆が言う。

「だってねえ。恋人だし」

「それをしていいのは」

「だからね。お友達はね」

「違うんじゃないかしら」

「えっ、違うの」

隆子はそれを聞いて考える顔になった。そうして言うのだった。

「じゃあ女の子同士は恋人には」

「普通はないんじゃない？」

「ねえ」

このことも話された。

「ちよつとねえ」

「それは」

「うっん、ないの」

それを聞いてだった。また考える顔になった隆子だった。

「女の子同士で恋人は」

「だから普通はないでしょ」

「女の子同士で恋人って」

このことはかなり真面目に話された。

「男の子と女の子ならあるけれど」

「それってねえ」

「同性愛じゃない」

「普通じゃないわよ」

「だから駄目なのね」

隆子はここまで聞いて顔を少し俯けさせた。

「それは」

「そう思うわよ」

「やっぱりね。男の子と女の子」

「それはね」

「私お兄ちゃんいるけれど」

隆子は今度は自分の兄のことをその話しに出してきた。

「お兄ちゃんとは」

「兄妹同士も駄目ですよ」

「それもよ」

「えっ、それも駄目なの」

隆子はきよんとした顔になった。

「兄妹でも」

「だから。家族やお友達じゃなくて」

「恋人が相手よ」

「そうした相手とよ、キスはね」

「するものじゃないかしら」

皆はこう話す。

「だから。隆子ちゃんもね」

「そういう相手を見つけるべきじゃない？」

「ねえ」

「そうするべきなのよ」

「うっん、そうなの」

隆子はまたしても考える顔になった。

「誰かをね」

「そういうことじゃないかしら」

「ねえ」

「やっぱりね」

「男の子ね」

隆子の頭の中にこのことが残った。そうしてであった。

ある日だ。同じクラスの岩崎琢磨にだ。こう言ったのであった。

「ねえ岩崎君」

「んっ、どうしたの？」

クラスの中で最も穏やかな男子生徒である。その彼に声をかけたのだ。

「あのね、これからね」

「これから？」

「恋人になつて」

こう彼に言ったのである。

「それでいいわよね」

「あの、恋人つて」

「何か。恋人同士になるとね」

「この前の先生の話？」

「キスができるようになるって聞いたから
それだけというのだ。」

第三章

「だからね」

「それで僕を恋人に？」

「うん、駄目かな」

あらためて彼に問う。

「それって」

「駄目って言われても」

「私のこと嫌い？」

こう彼に問うた。

「だったらいいけれど」

「嫌いじゃないよ」

琢磨はそれは否定した。実際に彼女のことを嫌いではなかった。

「別に。隆子ちゃんのこととは」

「じゃあいいわよね」

その言葉を聞いてだ。隆子は頷いたのだった。

「私とね。恋人にね」

「うん、それじゃあ」

「宜しくね」

こうして恋人同士になるのだった。そしてだ。

学校の授業の最後のホームルームが終わるとだった。隆子は琢磨のその席のところに来てだ。そうしてそのうえで声をかけるのだった。

「ねえ」

「何？」

「一緒に帰ろう」

こう彼に声をかけたのである。

「今からね」

「何で一緒になの？」

「だって私達恋人同士じゃない」
「だからだというのであった。」

「だからよ。デートよ」

「デートなんだ」

「恋人同士だからね」

それだからだと話す隆子だった。

「恋人同士って一緒にデートするものって聞いてたから」

「それでなんだ」

「うん、だからね」

「一緒に帰るんだ」

「デートしよう」

それをデートと言う隆子だった。

「そうしよう」

「うん、わかったよ」

琢磨もそれで頷いた。そうしてだった。

この日二人一緒に下校した。そこでだ。隆子が彼に声をかけてきたのだ。

「ねえ」

「うん、どうかしたの？」

「今私達デートしてるけれど」

彼女はここでもこのことを話した。

「それでね」

「何かあるの？」

「デートって」

こう言ってからだった。

「こうして一緒に歩くだけじゃなくてね」

「まだ他にあるの？」

「手をね」

こう琢磨に言うのである。

「手を握ったりするものなのよ」

「手を？」

「そう、手をね」

自分の方に顔を向ける琢磨のその顔を見ての言葉だった。周りはいつも通る住宅街だがそれは今は目には入っていないかった。

「握ったりするのよ」

「そうだったんだ」

「うん、私聞いたの」

こう彼に話す。

「だからね」

「そういうのだったら」

「手を握ってくれる？」

琢磨の顔を見て尋ねる。

「私の手。駄目？」

「うん、いいよ」

従順な琢磨はすぐにその言葉に答えた。

「それじゃあね」

「有り難う。じゃあ」

「うん」

隆子が差し出したその手を握り返す琢磨だった。手と手が触れ合うと温かった。その温かさを感じながらだった。

琢磨と隆子は二人並んでだ。そうして歩きはじめた。そこでまただった。

第四章

隆子がこう言ってきたのだった。

「帰り道で別れるまでね」

「こうして一緒にだよね」

「ええ、歩きましょう」

そうするというのだった。

「それでいいわよね」

「ううん、それはどうか」

しかしだった。琢磨はここではじめて自分の意見を言ってきたのだった。

「だって。僕達デートしてるんだよね」

「ええ」

「デートって。ドラマとかだと」

「ドラマだと？」

「女の子の家まで送ってるけれど」

彼が言うのはこのことだった。

「だからここは」

「私の家まで来てくれるの？」

「駄目かな、それは」

こう彼女に問うた。

「駄目だったらいいけれど」

「いえ、それだったら」

「いいの？」

「ちょっと待って」

隆子は彼がこんなことを言うとは思っていなかった。それでだ。

戸惑いながらだ。こう彼に言うのだった。

「そうね」

「うん」

「じゃあ。御願い」

思いつめそうしてから決めた顔で答えた。

「私のお家の前までね」

「うん、行っていいんだね」

「そうして。けれど何かこれって」

「どうかしたの？」

「本当にデートみたいね」

こんなことを言ったのだった。

「そうよね、これって」

「だからデートしてるんだよね、僕達って」

「それでもよ」

気恥ずかしそうな顔になって彼から顔を逸らしてだ。こう言ったのだった。

「何かこれって」

「そうなんだ」

「デートよね、本当に」

隆子はまた言った。

「私達の上のことって」

「そうだよ、デートだよ」

「何か。胸の奥が」

今だ。それを感じたのである。

「痛くなってきた」

「何かあったの？」

「わからない。けれどそれでも」

「痛くなってきたんだ」

「急に。どうしてかわからないけれど」

そうやってきたのだ。彼女の胸の奥が。

「こんなことではじめて」

「どんな感触なの？それって」

「痛くて苦しくて」

まずあこう答える。

「それに。熱くて」

「風邪、じゃないよね」

「急にひいたりしないから」

だからそれは違うというのだった。このことは自分でもわかった。

「だからそういうのじゃないけれど」

「それじゃあ何なのかな」

「わからない。けれど痛い」

「そうなんだ」

「ねえ。それでね」

「うん」

「やっぱり」

ここから先に言う言葉は迷った。拒むのかそれとも。そして彼女はだ。頭の中では長い間、実際は僅かなだけ迷ってこう答えたのだ。つた。

「一緒に来て」

「お家までだね」

「ええ、お家の前までね」

そこまでだというのだった。

第五章

「来て。よかったら」

「うん、それじゃあね」

「それがデートだからね」

「そうだね。男の子って女の子をお家まで送らないといけないからね」

「そうよね。そうだから」

それを理由にしてだ。隆子は琢磨の言葉を受けたのだった。

そうして二人は隆子の家まで歩いていく。手は握られたままだ。そこであった。

ふとだ。隆子がまた言った。

「あのね」

「今度はどうしたの？」

「岩崎君って」

「うん、僕？」

「どうなの？今」

こう彼に問うのだった。

「今はどんな気持ちなの？やっぱり」

「苦しくないかって？」

「そういうのはないの？今」

「苦しいっていうかね」

「ええ」

「何か恥ずかしいかな」

顔を赤くさせての言葉だった。

「今は」

「恥ずかしいの」

「何かね。こうして女の子と一緒に歩いているのって」

「そのことがなのね」

「何か恥ずかしいね」
「また言う彼だった。」
「これって」
「そうなの」
「うん、何かが違ってね」
「そうだというのである。」
「いつもとね」
「いつも男の子達で集まってるのとは違うからかしら」
「そうだね。けれどそれ以上に」
「それ以上に？」
「普段と全然違って」
「その赤らんでしまった顔で話す。」
「どうしても。何ていうかな」
「何て？」
「石黒さんと一緒にこうしているとね」
「うん」
「恥ずかしくなってくるんだ」
「これが今の彼だった。」
「どうしてかわからないけれど」
「そうなの」
「一緒にいたいと思うけれど」
「それでもだというのだ。」
「けれどそれでも一緒にいたらいけないような」
「そんな気持ちなのね」
「うん、おかしいよね僕」
「今度は彼が顔を逸らしてだ。そうして話した。」
「こんなこと言うなんて」
「おかしいかしら」
「おかしいよ。こんなのはじめてだし」
「私は苦しくなって」

「僕は恥ずかしくなってるね」

それが今の二人であった。

「何かおかしいよね、これって」

「デートってこういうものなのかしら」

隆子はここでこんなことを思った。そうしてであった。

琢磨が急に手を強く握ってきた。するとそこから熱さを感じた。その感じたことのない熱さにだ。隆子は思わず声をあげた。

「あっ、今のって」

「どうしたの？」

「熱くない？手が」

「うん、僕も今そう感じたよ」

これは琢磨もであった。

「何か。沸騰したやかんに触ったみたいな」

「そんな熱さよね。けれど」

それでもだった。

「離したくないの」

「僕も。家までだけれど」

「それでもね」

「うん、離したくない」

彼もだというのだ。

第六章

「それまでね」

「そうね。お家までね」

「こうしていよう」

こう話してだった。二人は隆子の家まで向かった。暫く歩くとだつた。赤い屋根の家が見えてきた。そこが隆子の家である。

その家の白い玄関まで来るとだ。隆子は琢磨に顔を向けてきた。そうしてそのうえで彼に対して言うのであった。

「ここまでね」

「うん」

「一緒に来てくれて有り難う」

「こう礼を言うのだった。」

「本当に」

「それはいいよ」

「いいの?」

「だってデートじゃない」

だからだという琢磨だった。

「だったら一緒にいるのはね」

「当たり前なのね」

「そう思うよ」

「こう隆子に言った。」

「それは違うかな」

「そうなるかしら」

「僕はそう思うよ。それじゃあ」

「待って」

手を離して自分の家に帰ろうとする彼をだ。無意識のうちに呼び止めた。

「今はね」

「今は？」

「デートだから」

またこのことを言う彼女だった。

「だからね」

「うん。何かな」

「最後に」

顔が自然と真っ赤になる。そうしてからの言葉だった。

「最後にね」

「何かあるの？」

「先生が言つてたけれど」

言葉を中々出せなくてだ。肝心なことを言つ前にあれこれと言つてしまつていた。だがそれでも隆子はこの言葉を琢磨に言つたのだつた。

「ほら、キスね」

「キス？」

「そう、キス」

言つた。このことを。

「キスしない？それで」

「キスを」

「そう、デートって好きな人とするものだし」

「だからキスも」

「先生言つてたじゃない。好きな人同士がキスするって」

「うん、そうだったね」

このことは琢磨も聞いていた。だから頷くことができた。

「先生言つてたね」

「だからね。最後にね」

言葉が中々出ない。だがそれでも必死に言つた。

「キス、しない？」

「キスをね」

「そう、キスね」

また言った隆子だった。

「今から」

「いいの？それ」

「いいわ」

こう琢磨に答えた。

「だからね。今からね」

「本当にいいんだよね」

琢磨は隆子に断った。

「それで」

「だから。いいわ」

そうだというのだった。

「御願いね」

「うん」

こうしてだった。二人は向かい合ってた。少しずつ動こうとした。

隆子は目を閉じようとする。どうしてかわからないが目が潤んできているのがわかった。そうしてその中だった。唇と唇がだ。

近付いてくる。その時にだ。

ぽつりとだ。雨が降ってきたのだった。

「えっ」

「雨？」

二人はそれで我に返ってた。顔をあげた。すると雨が本当に降ってきていた。

第七章

その雨を見てだ。隆子は言った。

「あの、岩崎君」

「うん」

「お家まで早く帰らないと」

「そうだね。さもないと」

「濡れるわ」

「傘はあるけれど」

それはと言った。ランドセルを背中から外してそのうえでだ。そこから折り畳みの傘を出したのであった。

それを開いた。そうしてだった。

「これでいいね」

「そうね。それでだけれど」

「うん。キスのこと？」

「どうする？ 続きする？」

少し上目遣いになって彼に尋ねた。

「今から」

「どうしようかな、それは」

「私はいいけれど」

隆子の方からの言葉だった。

「それはね」

「そうだね。じゃあね」

「ええ」

「ちよっとだけね」

琢磨は気恥ずかしそうに笑ってこう返した。

「しようか」

「ちよっとだけって？」

「あの、こういうのも」

「こつこついうのも?」

「多分男の子から先にするものみたいだし」

こつこつ言ってであった。自分の顔をそつと近づけてだ。そうしてだつた。

唇と唇をそつと重ね合わせた。それですぐに顔を離れたのだった。その唇を受けた隆子は最初はきよとんとしていた。だがそれが終わってから。言うのだった。

「今のが」

「これでいいよね」

終わってから。琢磨は微笑んで言った。

「キスは」

「え、ええ」

唇に手を添えてきよとんとした顔で話した。

「そうね」

「それじゃあね」

琢磨はまた隆子に告げた。

「家に帰るから」

「そうなの。それじゃあ」

「さようなら」

琢磨からの挨拶だった。

「また明日ね」

「ええ、また明日」

こつ別れの言葉を交えさせてだった。二人は別れた。後に残ったのはきよとんとなった顔のまま立ちすくむ隆子だけだった。

そしてそれから時間が経って。隆子は大人になった。その朝だった。

「じゃあ今からね」

「うん、行って来るよ」

こつ笑顔で今家を出る夫に対して言うのだった。夫も言葉を返す。「今日の帰りは遅くなるかな」

「そうなの」
「けれどね」

それでもまだという隆子だった。その顔はかつての幼い時の名残が残っている。

「それでもね」

「それでもなんだ」

「待ってるから。ゲームをして」

「おいおい、ゲームかい」

「丁度今はまってるゲームがあるのよ」

にこりとして話す。エプロンをしていてもその中身はかつてとあまり変わっていないようである。それがわかる今の言葉だった。

「だからそれをしながら」

「待っていてくれるんだ」

「待ってるからね。じゃあね」

「うん、行つて来るから」

「その前にね」

隆子の方からの言葉だった。そうしてだ。

身体を精一杯伸ばしてそれで夫にキスをしてだ。それからだった。

「行つてらっしゃい、琢磨君」

「うん、隆子ちゃん」

笑顔で言い合ってた。そのうえで夫を送り出した。キスをその挨拶として。

大人のキス 完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2232s/>

大人のキス

2011年4月4日22時25分発行